地質ニュース522号，8頁，1998年2月
Chishitsu News no.522, p.8, February, 1998

キーワードの魔術

中尾征三[1)]

今から20年近く前のことです．外部からの技術相談の電話が転送されてきました．電話の相手と話を進めると，相談の内容は染料の種類と“じしつ”の関係らしいと判ってきました．相手の方は，「お宅は地質（じしつ）調査所と書いてあるので，てっきり洋服などの生地の試験をしている所だと思いましたよ．」と，おっしゃるのです．私は，「すみません．こちらは地質（ちしつ）調査所と申しまして土地や地盤の方の地質を研究する所なのですが……」と，申し開きをする羽目になりました．当時は，同じ工業技術院の傘下に，産業工芸試験所や繊維試験所などという研究所の名称があったので，その方からみれば，多分，それらと並んで相談内容にピッタリの名称が目に飛び込んできたという感じだったのだと思います．

一方，最近の研究論文には表題以外にキーワードなるものを設けて，論文の内容を推察したり検索したりするのに役立たせています．この巻頭エッセイにもキーワードが必要だとしても，まさか“キーワード”なるキーワードを付けるわけにはいくまいなどと，バカなことを気にしています．

キーワードは，あまり抽象的でないものを数個選ぶことによって初めて生きてきます．4つ，5つのキーワードが共通する論文は，極めて近い分野のものになるはずです．しかし，たとえば“環太平洋”と“地質”という2つのキーワードしか有さない複数の論文の内容が，どのくらい接近したものであるかを推量することは大変困難です．

ところで，キーワードは論文の世界ばかりでなく，森羅万象を端的に表す便利な道具になる反面，キーワードが一人歩きして人間の行動を規制することもあります．最近，「“開発”という言葉は人類に害を及ぼすもののように捕らえられがちなので使わない方がよい．」とか，「“地球環境”は，もはや新鮮な研究分野ではない．」などという声を耳にします．これらは，キーワードに振り回されている例だと，私は思います．

また，地質学（地球科学）の世界でプレート・テクトニクス理論が確立され，より深部の現象を包括するであろうプリューム・テクトニクス理論が台頭する頃には，プレート・テクトニクス理論の限界が議論されました．それは，当を得たものであったと思いますが，その頃，「テクトニクスの研究などというのは古臭いものだ．」と，ある先輩が語ったのを覚えています．テクトニクスは，地質構造あるいは地質構造発達史という日本語に相当します．同様の感覚で，地球化学とか堆積学などという言葉は死語だといえば，そこから何か新しい学問が生まれてくるのでしょうか．これは，誤った観念でキーワードを振り回している例だといえそうです．

そういえば，行政改革を巡る議論の中でも，キーワードは重要な，そして危なっかしい働きをしています．数年前に仕掛けられた研究者の“任期付任用制度”の議論では，それが活性化のための切り札だとか，米国では民間の企業でも終身雇用制はほとんどないなどの導入根拠が示されました．その前から米国社会は，我が国の終身雇用制の長所を認識し，それにあやかろうと導入を検討していたのに……．

“独立行政法人”とはなにか．具体像はないが，皆さんが日頃不満に思っていること，不便を感じていることが解消されるかも知れませんよ，と甘く囁きかける声．“資源”，“海洋”，“地震”，“環境”などなど，組織や研究プロジェクトの一部のキーワードが共通していれば，国家的な規模での組織再編がいとも簡単にできるという錯覚があるのではないかとさえ思われます．

重要なことは，国家百年の計を念頭において，行政組織や科学技術研究政策を見直すことであって，小手先の技術で改革の実績を吹聴することではありません．

キーワードの魔術師たちへ．

1) 地質調査所 海洋地質部